▼ 毎日新聞　2009年（平成21年）5月18日（月）

速水元日銀総裁が死去 84歳

日本の金融不安やデフレ克服のため、世界でも前例のなかったゼロ金利政策や量的緩和政策に踏み切った元日銀総裁の速水優（はやみ・まさる）氏が16日午前、死去した。84歳だった。葬儀は近親者のみで行う。

（3面に関連記事）

98年3月、日銀職員の接待汚職事件で引責辞任した松下康雄総裁の後任として第28代日銀総裁に就任。日本が金融不安やデフレに襲われる中、03年3月の退任まで金融政策のかじ取りを担った。

99年2月にはゼロ金利政策を導入。00年8月には政府の反対を振り切る形でゼロ金利を解除したがITバブル崩壊に直面。01年3月には金融政策の目標を金利ではなく、資金供給量とする量的緩和政策を導入し、事実上ゼロ金利を復活させた。

神戸市出身。47年に日銀入行。81年に日銀理事で退任した。

【清水憲司】

◀ 朝日新聞【夕刊】
2009年（平成21年）5月20日（水）

論説委員室から　速水総裁の真価

金融政策という分かりにくい道具を操り、経済という形のない結果を求める。そんな中央銀行総裁の仕事を評価するのは本当に難しい。米連邦準備制度理事会のグリーンスパン前議長を見ればいい。現役時代に「巨匠」とたたえられながら、今や金融危機のA級戦犯扱いだ。

16日に逝った速水優さんは現役当時も辞めた後も、批判を浴びることの多い日本銀行総裁だった。ゼロ金利解除で失敗の烙印を押され、経済界が嫌がる円高論にこだわって頑固者と言われた。

98年秋には当時のルービン米財務長官に「日本の銀行は資本不足」と伝え、大騒ぎになった。それで信用を失った邦銀は金融市場で資金がとれなくなり、銀行幹部らは口々に「バカ総裁」とののしったものだ。筆者も当時、速水総裁を記者会見で問いつめた経験がある。

だが振り返ると、異なる視点の「歴史」が見えてくる。日本の金融危機を鎮めた最初の本格対策となった99年の大手銀行への公的資金注入は、速水発言が足がかりになったとも言えるからだ。日銀幹部は「あれは政府の背中を押す速水さんのショック療法だった」と指摘する。

最近は輸出頼み経済が失速し、速水さんの円高効用論への支持も増えてきた。

いま米国で10年前の日本同様、銀行の資本不足が心配される。今月上旬、特別検査を終えた米当局首脳が、もう大丈夫だ、と空々しく強調していた。その光景を眺めていると、かつての不明を恥じつつ速水総裁の強さを想う。〈原真人〉

神戸製鋼と私
三つのエピソード

元日商岩井理事　宮田　義清

イントロダクション

私が日商に入社した昭和二十五年（一九五〇）は敗戦の災禍の跡が未だ多く残っていた。その中で今橋三丁目の五階建の日商ビルは光って見えた。

当時日商は高畑会長始め永井、落合、楓、堀口等々壮々たる経営陣を容し、世間では石橋を叩いても渡らぬといった堅実な会社と語られていた。

入社後当時の総務部長の野原貫二氏から金属部非鉄金属課勤務の辞令を貰い社会人としての第一歩を踏み出した。

以来、米国及び豪州駐在の通算十年を除いて退社するまで非鉄金属の仕事に従事して来た。この間神戸製鋼とは随分多くの仕事をさせて貰ったが、同社の軽合金伸銅事業部とは終止密接な関係の中で様々な場面があった。今回、私自身が神戸製鋼と共に歩んで来た中から三つのエピソードを選んでみたが、それぞれのエピソードは戦後からの日本経済の大きな変動をバックにしたものである。

先ず第一のエピソードは日本経済が敗戦による壊滅的状態から復興し、池田内閣の所得倍増計画、そして「最早戦後ではない」と経済白書に書かれた当時のことである。即ち高度成長の入口にあった日本経済の中で非鉄金属原料の海外からの調達をめぐる事件をテーマとしている。

第二のエピソードは昭和四十六年のニクソンショック、即ち対ドル為替レートが三百六十円の固定相場から変動相場に突然変わった時神戸製鋼と日商岩井がタイアップして素早く対応したことである。

第三のエピソードは、日本の全ての産業が為替の変動制への移行に対応せんとしていた矢先、追打ちをかけるようにして襲った昭和四十八年（一九七三）のオイルショックである。日本のアルミ製錬は原料のアルミナを電気分解によりアルミ地金を生産するので市井では電気の塊ともいわれている。その電力を殆んど重油発電に依存していた日本はオペックによる重油高騰に悲鳴をあげたがアルミ製錬事業は正に痛打をあびせられた。オペックは更なる重油価格の上昇を意図しており、これ即ち日本ではアルミ製錬事業は存続不可能ということである。従って日本のアルミ産業はその原料を全て海外からの輸入に依存せざるを得なくなった。更に、海外からの輸入以外により供給の安定化のためには自ら海外のアルミ資源に投資し自前のアルミ地金を確保する必要性が生じた。

この時、神戸製鋼と日商岩井が共同して西オーストラリヤのワースレイ・アルミナプロジェクトに参画したのがこのエピソードである。

エピソード（1）

昭和三十四年十月（一九五九）私はサンフランシスコ駐在を命ぜられ丁度一ヶ月前に就航したパンナムのボーイング707ジェット機で単身赴任した。出発に際し、当時日商非鉄金属部の今井良一部長よりアメリカ西海岸での非鉄原料スクラップの直接買付けを命ぜられた。

着任早々、この仕事に入るに先立ってサンフランシスコの対岸のオークランドの全米屈指の鉄屑のシッパー、ラーナー社を訪ね、同社の非鉄担当のクロス氏にこれからの仕事のすすめ方を相談した。同氏より私に、先ずはアメリカの非鉄スクラップ協会（ナショナル　セカンダリーメタル　インダストリー　アソシエーション）通称ＮＡＳＭＩに入会することを勧められ早速入会の手続きをとって貰った。日本商社としてＮＡＳＭＩのメンバーとなったのは私が最初である。定期的に開かれるコンベンションに出席し多勢のシッパー、パッカー、ディラーと顔を合わせ、これらの業者の中からクロス氏のアドバイスで10数社との取引が始まった。

（注、当時神戸製鋼は未だ高炉メーカーではなく、鉄鋼原料は銑鉄とスクラップであり、スクラップはアメリカからの輸入が大半であった。ラーナー社は神戸製鋼の米屑の最有力輸入先であった）

西海岸の北はワシントン州、そしてオレゴン州に地元カリフォル二ヤ州の有力シッパーの中で全米一の集荷力を持つロスアンゼルスのアルパート社を訪問した時は、同社の社長ジェーク　フアバー氏が直々にロス空港に私を迎えてくれた。元日商岩井の非鉄部門を継承しているアルコニクス社は今現在もアルパート社とは友効な関係にある。

少し前置きが長くなったが、或る日在ホノルルの日商の代理店であったモアナルア社よりホノルルの米軍基地での米国海軍の砲弾の大量の大型薬莢の入札に参加してはどうかとの電話があった。早速私はホノルルに飛び基地ヤードに山積みされた現場を見せられたがおよそスクラップとは云えぬ新品同様のピカピカの代物であり伸銅メーカーとしては溶解ロスゼロの最上級の原料たり得ると判断しホノルルより直接東京本社に打電、応札した。残念ながらこの第一回目の入札では落札を逸したが、数ヶ月後の第二回目の入札では僅差で落札に成功、本社非鉄部はこれを全量神戸製鋼に納めた。

所がである。当時在日外商の最大手のマイルズメタルの上田克己社長は日商がホノルル海軍の薬莢を直接入札し落札したことに激怒した。日商の担当課長弘田有作氏を電話口に呼び出し「日商の今回のホノルル海軍薬莢の落札は地場業者の収益を侵すこと甚だしい。以後神戸製鋼向け銅地金の取扱いから日商をはづし他の商社に変える」というものであった。

以上の次第で残念ながら今後のホノルル海軍の入札はあきらめざるを得ないと観念していたところ、非鉄部長今井氏は神戸製鋼、軽伸事業部長の国広五郎常務にこのことを話したところ国広氏は直ちにマイルズメタルの上田社長に「日商のホノルル海軍薬莢入札を理由に、当社割当の電気銅の取扱いから日商をはずすのであれば、神戸製鋼としては今後はマイルズ以外の外商から輸入し従来どおり日商にこの取引に入って貰う」と電話された。マイルズは、これには驚き日商への前言を取り消す旨神戸製鋼に陳謝したというのがこのエピソードの結末である。

エピソード（2）

昭和四十六年（一九七一）のニクソンショックが日本経済を震駭させたことはご記憶のこと、思う。ニクソンによる米ドルの金兌換停止はそのすぐあとのスミソニアン協定によって円の対米ドルレートは従来の固定レート三百六十円から三百八円に大幅に切上げられた。併しこの協定も直ぐさま破綻し各国の為替レートは変動相場に移行し、円の対米ドルレートは二百八十円前後で上下するようになった。日本政府も、又日銀もなす術もなく混乱状態に陥ったことは速水　優氏の「海図なき航海」に詳しく述べられている。即ち日本経済が敗戦から

復興へ、そして経済の正常化更には高度成長への過程で対ドル三百六十円の固定相場に助けられたと云う事実は否定出来ない。それだけにこのショックは日本経済にとって戦後始めて受けた衝撃であった。

このニクソンショックに一早く対応すべく神戸製鋼の軽伸事業部原料担当の板坂常務から当時軽金属部長の私に呼び出しがあった。これまで、神戸のアルミ地金の手当ては、原料の供給安定確保上、供給元は日本軽金属（日商岩井扱）、三菱アルミ（三菱商事）、昭和製工（丸紅）、住友化学（神鋼商事他）からほゞ均等に購入していた。板坂常務から私が相談を受けたことは端的に云えば日軽金の五十％の株主であるアルキヤンを利用して神戸製鋼の購入するアルミ地金を当時の通産の行政指導にもとづく建値制を排除して実勢為替レートに準じた価格でのアルミ地金の購入に切替えることであった。つまり従来の原料地金の供給の安定を第一義とする神戸製鋼の原料政策を転換し原料供給先を先づはアルキヤン、次いでその他の輸入先に切替えんとするものであった。

神戸製鋼は板坂常務、日軽金は堀努専務と浅野営業部長（後社長）、アルキヤンより日軽金に出向中のマックファーレン取締役、そしてアルキヤン代理店の日商岩井からは私、以上五名で取決めたことはアルキヤンと日軽金間でアルミ地金をスワップして神戸製鋼に購入してもらうこと。この間アルミ地金の建値と為替レートの実勢から算定した価格の調整方法についての詳細な約定が成立した。結果、日商岩井扱の日軽金アルキャン地金の神戸製鋼への納入量は飛躍的に増加し、神戸製鋼の購入量の八割を上回った。

この神戸製鋼のアルミ地金の購買方針に驚愕した三菱商事と丸紅は板坂常務との面談を申し入れた。要は従前通り四社均等に配分願いたいと云うものであった。彼等が板坂常務と面談した日の夕方板坂常務より電話で呼び出され参上した。板坂常務より「商事と丸紅は今さっき帰ったよ。彼等に云ってやったがそれは仕様がないわ。何といっても日商岩井は神戸製鋼の親会社やからな」これには商事、丸紅からはグウの音も出なかったとの事、併し常務は続けて「彼等も馬鹿ではない。今回の日軽金とのやりとりは、今後のアルミ地金取引が時勢に合致した方向に向う事は彼等も解っている筈だ。従って日商岩井も心構えしておく必要がある」と。

それにしても板坂常務から商事、丸紅に「日商岩井は神戸の親会社だからな」と云って貰ったことは脱帽以外の何物でもなかった。

エピソード（3）

私は五年間のメルボルン駐在から再び非鉄金属本部に帰任したのは昭和五十四年（一九七九）の一月であった。しばらくして神戸製鋼鈴木満信専務から声がかゝり事業部室で「神戸製鋼として西オーストラリヤのワースレイ、アルミナプロジェクトに参加する方針を固めた。ついては日商岩井もこの事業に神戸製鋼と一緒にやってみてはどうか」というものであった。同席の村本正佐理事より「アルミナ製精の世界の平均コストからみて、又長期的にみてもこのプロジェクトはカントリーリスクの少ないオーストラリヤでの事業でありメリットは大きい。」とのこと。更に続けて、元々ワースレイはアルコアが事業化を企画していたが、アルコアは既に西豪州でアルミナ事業を操業しているのでワースレイの企画はアメリカの独禁法に触れる公算が大きい。よってこの権益を同業のレイノルド社に譲渡したものである。現在英蘭シェル石油、オーストラリヤのＢＨＰもレイノルドの企画に参加を表明している。神戸製鋼としては海外事業だけに商社の海外機能が必要であり、又操業開始後のアルミナの販売、委託製錬先等との取引オペレー

ションは信頼出来る日商岩井が参加すれば心強い。神戸製鋼としてもこれからトップ決済を受ける順備に入るので日商岩井でも早急に本件に取組んで貰いたいと思う。とのことであった。

当時の日商岩井は例の丸紅のロッキード事件に続いて起こったグラマン事件の直後で社内は騒然としていた。とても海外への大型投資案件をとりあげ得る状態ではなかった。従ってこれを社内投融資委員会にかけるに当たり経営陣へのプレゼンテーションには大いに苦労させられた。

プレゼンテーションは先づは先のオイルショックにより電力費が高騰し電力コストの大巾上昇により日本のアルミ製錬事業は崩壊しアルミ産業は原料地金を百％海外に依存するに至った。日本の三大アルミ圧延メーカー、住友、神戸、古河の三社を始めこれに商社を加えて海外に自前のアルミ地金供給のソースの開拓を急ぎつゝあった。幸、日商岩井はカナダのアルキャン社の代理店であり、輸入地金の取扱量が増加し恵まれたポジションにあった。併し神戸製鋼としては主原料を100％輸入に頼ることは危険であり例え一部でも自前のアルミ地金供給拠点が海外に必要であった。

海外のアルミ製錬に乗り出すにしてもアルミ製錬は大型装置産業であり巨額の投資が伴う。又、海外はどこでもよいわけでなく、其処にカントリーリスクがあり、事実、昭和電工／丸紅のヴェネズエラプロジェクトは突然の国有化により多大の打撃を受けた。この点では先のイラン石化事業で大きな損害を受けた三井物産は全体の趨勢に反して極めて慎重であった。

ワースレイの最大のメリットはアルミナの原料であるボーキサイト鉱区の権益も同時に取得するものであること、加えてアルミナ工場はこの広大な鉱区内に建設するものであり、鉱区区域内にアルミナ工場を持つのは西オーストラリヤ、ピンジャラのアルコア社のみでありボーキサイトのアルミナ工場への輸送費がかからないという大きなメリットがある。

更にワースレイのもう一つの特異点はアルミナはボーキサイトを苛性曹達で処理して生産されるがその際発生する大量の残滓（これを赤泥と呼んでいる）の処理、つまり廃棄が大きなネックである。アルミナ工場はいづこも赤泥を公海上の海洋投棄で廃棄して来た。これが国際海洋保護条例で禁止されて以降は陸上に廃棄場所が求められなくてはならない。特に我が国のような国土の狭い国ではこれが大きなネックとなった。此の点ワースレイは、赤泥をボーキサイト採掘の跡に埋立てればよく、又埋立地は直ぐ近くにあり全く問題なく廃棄出来る。

かくしてコンソーシアムの構成メンバー即ち米、英蘭、豪、そして日本の各代表はレイノルド本社のあるリッチモンドに集まり第一回の会議がもたれた。日本からは村本理事と私が出席し、レイノルド及びエンジニアリング担当のベクテル社から詳細なプロジェクトの説明があった。この席上、ベクテルより「実はボーキサイトの鉱床の真ぐ下に有望な金鉱脈がある」とのこと、ボーキサイトの鉱区権はコンソーシアムの所有するものであり第三者が金鉱脈の利権をめぐって法的手段を執ることは出来ない。併しメンバーとしてはワーレスレイが西豪州政府から正式に認可を取付けるまではメンバー各社は各々の社内で慎重に対処されたいとのコメントがあった。従って日商岩井内での投融資審議会及び経営会議にも本件は一切伏せて通した。ワースレイが正式に発足したあと、コンソーシアムには金鉱脈の利権のみを切り離してこれを売却することにより相応の利益がもたらされた。

昭和五十六年（一九八一）メルボルンにおいて神戸製鋼からは村本理事、日商岩井からは私が参席してワースレイ、コンソーシアムの調

印を終え、続いて西豪州政府の正式認可がおりた。私は、このあと数年在社のあと、ワースレイの立上りを前にして、理事停年に三年を残して日商岩井を退社し独立した。新しい事業は非鉄金属とは全く異なる分野であるが奇くもその舞台は西豪州となった。

その後二十有余年たったが、この間多くの変遷がありコンソーシアムのメンバーも大きく変わった。レイノルド社はアルコアに吸収合併され、ＢＨＰ及びシル石油は英国ビリトン社にその権益をシフトした。又日本を含む世界の鉄鋼業界の再編が進み、神戸製鋼も、集中と選択の経営方針の一つとしてワースレイの権益を手放すことになった。それぞれのエクイテイはコンソーシアムの定めるところにより再配分された結果、日商岩井の権益比率は十％となった。ワースレイは当初年間百万トンの設備でスタートしたがその後の増産設備投資により現在は年産四百万トンとなった。これは世界のアルミナの単一工場としては最大の規模である。日商岩井の十％の権益はアルミナで四十万トン、アルミ地金に換算すれば年間二十万トンと云うことは一つのアルミ地金製錬として充分な規模の地金量に相当する。このアルミナは、現在主として中東バーレンのＢＡＬＣＯ社で地金に製錬されて日本を含む各国に輸出されている。ＢＡＬＣＯの製錬用電力は重油堀削時に排出するいわゆる排ガス発電によるものでありその電力コストは世界中で最低と考えられる。日商岩井は今や工場を待たぬアルミ製錬メーカーといってもよい。そしてこの事業と権益は現在双日の持つ海外事業の中では最右翼に属するのでなかろうか。ここに至るまでには多くの方々の支援を得て来たが中でも最初からこのプロジェクトを担当し、プロジェクトを高収益事業として軌道に乗せた功労者は且つての私の部下であった山下英夫氏（現アルコニクス社常務）であると思う。国際コンソーシアムのメンバーは全て世界有数企業であり、運営上の法律や会計基準の実務面とアルミナ取引をめぐるオペレーション業務をこなし得る人材は限定されている。それにしても、このプロジェクトに日商岩井が参入出来たのは一重に神戸製鋼の支援の賜物であることを銘記すべきと思う。

エピローグ

過日、本文を書くに当たり私自身の記憶を整理するため久し振りで村本さんとお会いした。八十八才になられているが仲々お元気であった。レイノルド社での会議の帰途　リッチモンド空港のバーで村本さんからテキラをベースにしたカクテルのマルガリータをご馳走して貰った。とてもよく覚えておられた。村本さんは長く長府工場長を勤められ、その間私もよく出張して工場で村本さんのご指導を仰いだ。若かりし頃アメリカ向けアルミ合金板の輸出では大変お世話になった。村本さんとレイノルドの深いご関係がワースレイのプロジェクトに結びついたことは間違いない。

国広さんは家も近所であり、よく小金井ゴルフにご一緒させて貰った。神戸製鋼が大阪で本社業務が行われていた昭和三十年代前半、神戸製鋼としてはアメリカ向け銅管の輸出第一号を成功したときお褒めと激励を戴いたことを覚えている。

板坂さんと日軽金の堀さんとは共に長唄の趣味を同じくされ、毎年、年末の忘年会には私が名指しで呼ばれ一度だけであった大晦日から元日の午前様迄お付合いさせられたことを思いだす。

いづれにしても良き時代であったとつくづく思う。本文には既に鬼籍に入られた多くの方々のお名前をそのまゝ記述させて戴いた。心から感謝申し上げると共にご冥福をお祈りする次第である。

（了）